# 和文讀本

稲垣千頴輯

巻三

ホ2
490
3

東京專門學校圖書
利2 門 490號 3巻

# 和文讀本巻三

明治　年　月　日　氏寄贈

稲垣千穎　輯

## 武勇

### 袴垂保昌にあふこと

宇治拾遺物語　源隆國卿

昔袴垂とていみじきぬすびと(盗)の大将軍ありけり。十月ばかり(頃)に衣の用ありければ衣少しまうけ(設)んとてさるべき所々をうかゞひありき(歩)けるに夜中ばかりに人皆しづまりはてゝ後月の朧なるに。

きぬあまた着たりけるぬしの、さしぬきのそば挾みて、きぬの狩衣めきたるを着て、たゞ一人笛ふきて、行きもやらずねりゆけば、あはれ是こそ我にきぬ得させん人なめれと思ひて、走りかゝりてきぬを剥がんと思ふに、あやしく物の恐しく覺えければ、添ひて二三町ばかりいけども、我に人こそ付きたれと思ひたるけしきもなし。いよ〳〵笛を吹きて行けば、試みんと思ひて、足を高くして走寄りたるに、笛を吹きながら見返りたるけしき、取りかゝるべくも覺えざりければ、走りのきぬ。かやうにあまたゝび、とさまかうさまにするに、露ばかりも騒ぎたるけしきなし。希有の人かなと思ひて、十余町ばかり具して行き、さりとてあらんやはと思ひて、刀を拔きて走りかゝりたる時に、そのたび笛をふきやみて、立ちかへりて、こは何者ぞと問ふに、心も失せて、我にもあらでついゐられぬ。又いかなる者ぞと問へば、今は逃ぐともよもにがさじと覺え

されバ。ひはぎ(人剥)に候ふと いへバ。何者ぞととへバ。
あざな袴垂となん いはれ候ふと答ふれバ。さ
いふ者ありときくぞ。危げに希有のやつ(奴)かなと
いひて。供にまうでこ(来)とばかりいひかけて。又同じ
様に笛ふきてゆく。此の人のけしき。今はにぐとも
よもにがさじと覚えければ。鬼に神(キモ)とられたる
やうにて。共に行くほどに。家にゆきつきぬ。いづこ
ぞと思へバ。摂津前司保昌といふ人なりけり。家の
内によびいれて。綿あつき衣一を給はりてきぬ

の用あらん時ハ。参りて申せ。心も知らざらん人
にとりかゝりて汝あやまちすなと ありしこそ。あ
さましくむくつけくおそろしかりしか。いみじ
かりし人のありさまなり。捕へられてのちかたり
ける」

## 重忠長居相撲のこと　古今著聞集

橘　成　季

鎌倉前右大将家に。東八ヵ国うちすぐりたる。大
力の相撲出きて申して云。当時長居に手向をべ

き人おぼえ候はば。畠山莊司次郎ばかりぞ。心に
くゝ候ふ。それとても長居ハ。たゆまくハいかでか
悪
ひきはさらのし侍らん。と詞もそゞろにいひ
たり。大将聞給ひて。此事ねさましう思給ひける
折ふし。重忠出来りたり。白き水干に。葛袴。黄なる
衣
きぬをぞ着たりける。侍に。大名小名。所もなく居
なみたる中をわけて。座上にひしと居たりける。
大将なほ近くよれ〳〵とありけれども。畏りて
侍りけり。さて物語して。抑所望の事の候ふを。

申し出さんと思ふぞ。定めて不祥にこそ侍らんず
らん。と思ひ給ひあへる。又たゞふせまんも忍びが
たくて思ひ煩ひける。とのたまはせたれバ。重忠と
かく申したる事ハなくて。畏りて聞居たりけり。此事
たび〳〵にありける時。重忠ちと居直りて。君の
御大事。何事まで候ふとも。いかでか子細を申候
はんと申したりけれバ。大将入興したまひて。そ
の庭に長居めされ候ふぞ。貴殿と手合をして。試さ
むと申したりなり。東八ヵ國のすぐりたる(モク)らし自

稱仕るがねさましう覺え候へバ。頼朝なりとも試みむや。と思ひ候へども。とりときそこ(其方)をてごろ(本ノマヽ)申ぞ。試みたまへとのたまはせたれバ。重忠存外げに思ひて。弥〻深く畏りていふことなし。大将されバこそこれハ身ながらもひあひの事にて候へ。さりながらも。わが所望此事にありと侍りける時。重忠座をたちて閑所へゆきて。くゝりをとき烏帽子かけなどしてたり。長居ハ庭に床子に尻かけて候ひけるが。それもたちて。たふさぎ(褌)のきてけり

出でけり。まことに體力士の如くにみえけれバ。畠山もいかでとぞおぼえける。さて寄合ひけるに。手合して長居畠山が小くびを強くうちて。袴の前腰をとらんとしけるを。畠山左右の肩をひしとおさへて近づけず。かくて程へけれバ。景時今は事がらごらん候ひぬ。さやうにて候ふべからんと申しけるを。大将いかに。さるやうハあらん。勝負あるべし。とのたまはせければ。長居を志かりけるにをしをしてたり。やがて死入りて足をふみそら

しかれバ人々よりておしかゞめてかき出しまかり重忠ハ座にかへりつゝ事もなく一言もいふことなくてやがてゐざまかり長居ハそれより肩の骨くぢけてかたはものになりてすまひとる事もなかりけり骨をとりひしぎたるにこそ目驚きたることとなり」

## 遣唐使虎を殺すこと　宇治拾遺物語

源隆國卿

今ハ昔遣唐使にてもろこしに渡りける人の十ばかりある子をえ見であるまじかりけれバ具して渡りぬさてすぐしけるほどに雪のいと高くふりたりける日ありきもせで居たりけるにこのちごの遊びにいでゝいぬるがおそく帰りけれバあやしと思ひて出でゝ見れバあしがたうしろの方よりふみてゆきたるに添ひて大なる犬の足形ありてそれよりこのちごの足がた見えねバ山さまにゆきたるを見てこれハ虎の喰ひていきけるなめりと思ふに為ん方なく悲しくて太刀をぬき

て。足形を尋ねて。山の方にゆきて見れバ。岩屋の口に。このちごを喰殺して。腹をねぶりて伏せり。太刀をぬきて走りよれバ。得にげてもいでかいかゞまりて居たるを。太刀もて頭をうてバ。鯉の頭をわるやうにわれぬ。次にまたそばさまにくはんとて走りよる背中をうてバ。背骨をうちきりて。くた〳〵となしつ。さて子をば死たれども。脇にかい挾みて。家に帰りたれバ。その國の人々見て。おぢあざむこと限なし。もろこしの人ハ。虎にあひてのがる事ぞ難きに。かく虎をば打殺して。子を取返して来たきバ。もろこしの人ハ。いみじき事にいひて。なほ日本の國をば。兵のことハならびなき國なりとめでたれど。子死たれバあまりこそハせん」

## 遊戯

### 行成卿扇合のこと　古今著聞集

橘成季

行成卿。いまだ殿上人のころ。殿上にて扇合といふ

ことありけるに人々珠玉をかざり金銀をちりばめておとられおとらじといとなみあへりけるに彼の卿は黒くぬりたるほそぼね（細骨）に黄なる紙をはりて樂府の要文を真草にうちまぜてところどころ書きていとされたりける御門（ミカド）御覧ぜられて此扇こそいときよらなれとて御前にとどめられけるとぞ（イヒ伝ヘタル）

## 花合　古今著聞集

橘成季

後二月は閏二月をいふ内の女房は内裏の女官をいふ

右衛門の陣は紫宸殿の西南月花門の内なり

さくらびとは催馬楽呂の歌の名なり

長治二年後二月廿日あまりの頃内の女房少々花を見侍りけるに廿三日に一枝を折りて奉るべきよし天氣ありけれども日くれて奉らざりけり其うらみ（遺憾）ありとてつぎの日左右をわかちて花を合せられけり左の方のひとびと櫻の枝をもちて右衛門のぢん（陣）の後にうちつどひていつえだ（五枝）をえらびてもて参りけり備後介有賢朝臣拍子とりて櫻人をうたひけり管絃をもつけ侍りけりこの花を泉の御所にうつしおきて釣殿にて御遊ありけり右の方

もちまハ。今俗ニ篤薹とふものなり

花あそびありけれバ。上達部五人をめしいだされけり。もちま（洲濱）にたてゝまで参りけり。その後。満座和歌を奉るべきよし。勅定ありて。人々つかうまつりけり」

兼時敦行競馬のこと　古今著聞集

橘成季

正暦二年五月廿八日。攝政殿。右近の馬場にて。競馬とてつがひを御覧じけり。十番　山井大納言。儀同三司。共に中納言にておはしける。左右に分けて。公卿おほく参られけり。一番ハ左将曹尾張兼時。右将曹同敦行つかうまつりけるが。兼時が轡たびくぬけゝり（脱）なれども。おつることハなかりけりさりながらも。つひに敦行勝ちになりけり。兼時敦行にむかひて。まけてハいづ方へ行くぞといひたりけり。人々その詞を感じて。纏頭ありけるとなん。いまだ競馬にまけざりけるものにてかくいひける。いと興あるいひやうなるべし」

俳諧

## 道風朝臣の朗詠集のこと　徒然草

卜部兼好

ある者、小野道風のかける和漢朗詠集とてもちたりけるを、ある人、御相傳うける(浮虚)事まハ侍らじなれども、四條大納言(公任)えらばれたるものを、道風かかんこと、時代や違ひ侍らん、おぼつかなくこそといひければ、さ候へバこそ世にあり難き物には侍りけれとて、いよいよ秘しけり

## 鳥羽僧正の繪のこと　古今著聞集

橘成季

鳥羽僧正ハ、近き世にはならびなき繪かきなり。(中略)いつのほどの事にか(アリケン)供米の不法のことありける時、繪にかきたる、辻風のふきたるに米の俵を多くふきあげたるが、ちりはひ(塵灰)の如くに空にあがるを、大童子法師ばら(輩)、走りよりてとどめんとしたるを、さまざまにおもしろく筆をふるひてかきたるを、誰がしたりけん、其繪を院御らんじ

て御入輿ありけり。そのころを僧正に御たづね
ありければ。あまりに供米不法に候ひて。實のも
のは入り候はで。糟糠のみ入りて軽く候ふほど
に。辻風に吹き上げられ候ふを。さりとては
小法師ばらが取りとゞめんとし候ふが。をかし
く候ふを書きて候ふと申されければ。比興の事
ありとて。それより供米のさたきびしく あり
て。不法のことなかりけり」

學生定茂のこと　古今著聞集

橘成季

進士志定茂といふさむらひ學生ありける。ある
人のもとに。有馬の湯へ行くとて。むかばきを人
に借りたりけるに。ひとかけかしたりけるを見
て。ふくろまでかしたる過分ありとて。かたし
をばかへしてけり。その曉になりて。片皮に左右
の足をいれて。馬にのらんとしけるに。なにとかはの
られん。あひにあひたる下人ありて。おしのせけ
れども。かなはで。かくのりわづらふほどに。人見あ

ひてあれハそのまゝといひこぞりひたるをりなど
めてさとりになりをこがましさよとぞ
彼の定茂乾元二年十月廿八日文殿の作文に参
りたりけるに夏の袍を着たりけるを見て上下わ
らふことかぎりなし定茂おのれを笑ふとは知
りげもなくてその日ハやみにけり後にあるかん
だちべの許へ参じて申したるハひとひ文殿の
作文に夏の袍を着てまゐりて侍りしを人々
見候ひてあまりに學問をして四季をもわすれし

らぬやさしさといふさだめあるこそのりて候へ
と自讃しけれバきく人の嘲哢せること限な
かりけり

良覚僧正のよび名のこと　徒然草　卜部兼好

公世の二位のせうとに良覚僧正ときこえしハ
極めて腹あしき人なりけり坊のかたはらにお
ほきなる榎の木のありけれバ人えの木の僧正と
ぞいひけるこの名然るべからずとて彼の木を伐

られにけり。其根のありければ、きりくひの僧正
といひけり。いよ〳〵腹たちて、きりくひを堀りす
てたりければ、其あとおほきなる堀にてありけれ
ば、堀池僧正とぞいひける」

人の田苅る男の言　徒然草

卜部兼好

人の田を論ずるもの、訴にまけてねたさに、その
田をかりてとれとて、人をつかはしけるに、まづ
道すがらの田をさへかりてゆくを、是は論じ
たまふところにあらず。いかにかくはといひけれ
ば、苅る者ども、そのところとてもかるべきことわ
りなけれども、ひが事せんとてまかる者なれ
ば、いづくをかからざらんとぞいひける。ことわりい
とをかしかりけり」

麻を射損じたる人のこと　古今著聞集

橘成季

前大和守時賢が墓所は、長谷といふところにあり。
そこの留守するをとこ、つるをかけて、麻をと

りけるほどに。ある日。大麻かゝりける。この(を)
とこおりふしゆう。そゝりのけてとりたらんにはいとねん(念)
なし(無)。射殺したりといひて。弓の上手のよし。人に
きかせんとおもひて。そゝりまつりける麻に向
ひて。大かりまた(雁股矢)をつがひ(番)て射たりけるほどに。
其矢。そのふは中らずして。そゝりにかけり
けるこゑかしこにあかりけりまで。このひゝきれて。
麻は事ゆゑなくとびまよひげてゆきゝけり。此
男。このかしら(頭)かき(掻)をきれども。さらに益なし。



## 猫また怖るゝ連歌師の事　徒然草

卜部兼好

奥山に猫またといふものありて。人をくらふなる
と人のいひけるに。山ならねども。これら(此処等)にも猫の
へあがりて。猫またになりて。人とる事はあなる
ものをといふ者ありけるを。なに阿彌陀佛との
や連歌しける法師の。行願寺のほとりにありける
が(コヲキキテ)一人ありかん(歩行)身は心すべき事にこそと思
ひけるころしも。あるところにて夜ふくるま

で連歌して只ひとりかへりけるに小川のはたに
て音にきゝし猫またあやまたず足のもとへふ
とよりて来てやがて(即)かきつくまゝに頸のほど(辺)をくはんと
とす肝こゝろもうせて(喪)防がんとするにちからも
なく足もたゝず小川へころび(轉)入りて助けよや猫
またよや／＼とさけべバ家々より松どもともし
て走りよりて見れバ此わたり(辺)に見知れる僧な
りこハいかに(シタルゾ)とて河の中より抱きおこしたれバ
連歌の賭(モノ)とりて扇小箱など懐に持たるも水に
入りぬけう(希有)にして助りたるさまにてはふ／＼(這)家
に入りにけり飼ひける(コレハコノホウシ)犬のくらけれどぬしを知
りてとびつきたりける(オヒ來リ)とぞ

をこ者己が影に怖るゝ語　今昔物語

源隆國卿

今は昔受領の郎等に心はおくれて(臆)人に武く見え
んと思ふをとこありけりある日あかつきに外へ
ゆかんとて用意しけるに其妻未明におきてくひ(食)
もの(物)のまうけ(設)をせんとするにありあけの月の

板間よりさし入りたるひかりにて。おのが影のう
つりたるを見て。犬におそれつゝ。あわてゝさわぎ
つゝ。夫がふしたるそばににげゆきて。夫が耳に
さゝやきけるハ。かしこに髪おどろ〳〵としたるわらは
ぬすびとが。入きてたちたるあり。出て見たまへ
といへバ。夫それハいかにせんとするにや。ねたき事
かなといひつゝ。枕上にかけたる太刀をとりて。
其やつ頸うちおとさんとのゝしりて。髪うちみだ
しあがりて。はだかにていでけるが。月影におの

がかげのうつりしを見て。童にはあらで。太刀ぬ
きたるをとこにこそありけれ。かなふまじとふる
ひわなゝき。をうとさけびて。にげいりて。妻に向ひ
て。ごおもとハ。うるさきつはものゝ妻とこそおもひ
つるに。何を見あやまりたるにや。わららはぬすびと
にハあらで。髪みだしたる男の。太刀ぬきもちたる
にこそあなれ。されどもこの盗人。臆病ものとみ
えて。おのがいでたるを見て。持ちたる太刀をおとし
をのゝきふるひつ[き]我ハ外へゆく門出なれば。はやの

なき疵被らんもよしなし。をそなをばよも切らじ。ゆきて追ひいだすべしといひて。衣を引かぶりてふしたり。妻いふやう。かひなき事なり。かくて弓矢をとりて仕へ給ふはや。いでられゆきて見んとてたちいづるに。夫のそばはありけるかみしやうじはありけれバ。たふれて夫が上におほひぬ。夫これをバ盗人があそびかゝるぞと心得て。聲をあげてさけびけれバ。妻がいふやう。盗人はちゆく立さりたり。その上なるハ障子のたふれかゝりたるなりといふ時。夫おきあがりて見るに。盗人もなかりければ。居直りて。はだかなる脇をかきて。手をねぶりて。そのやつまことは我が許に入来て。物取らで去りなんや。盗人やつ。障子をふみつけて去りにけり。入りてしばしあらばやつばら必搦めてまし。ごおもとのつたなくてかくはにがしつるといひければ。妻ハあきれてぞ笑ひける後に妻が人に語りけるを。聞傳へて。かくなんかたりけるとなり

覊旅 離別附

治承四年福原の新都ふ供奉の人々所々遊覽の條 源平盛衰記

不知作者或云葉室時長卿作

八月十日あまりにありて、新帝の供奉の人々つれ〲をなぐさみづらひて名所の月を見んとて、おもひ〱ふ行別る。ある八住ノ江・住よし・難波がた・葦屋の里ふ嘯きゆく人もあり。或ハ源氏ノ大将の跡をおひて、須磨より明石ふ浦傳ふ人もあり。和歌・吹あげ玉津嶋・月落ちかゝるあはぢしま・松風はげしき高砂の・波間をわくる人もあり。浦路をめぐる人もあり。其中ふ後徳大寺ノ左大将實定ハ、舊都の月をこひしのびて、入道[清盛]ふいとまこひて都へ上り給ひけり。[コノ卿ハ]されども心すき[風流]給へる人ふて、うき世の旅の思出ふ、名所々々を問見てぞ上られける。千代ふ變らぬみどりは、雀の松・御影の松、雲井にさらしゝ布引ハ我が朝第二の瀧とこそや。業平ノ中将の、かの瀧ふて、星の河邊の

伊勢物語なる
はるゝよの星か川べの
蛍かもわがすむ方のあまの
たく火か

求塚の故事ハ。万葉集。大和物語等ふ見えたり
新古今集太上天皇。みわたせバ山本かすむみなせ川タハ秋となにおもひけん

螢のと。浦路ちかきのふながめけん。いづくあるらんお
ぼつかな。求塚といへるハ。こひゆゑ命を失ひし。二
人の夫の墓とかや。猪名のみなとのあけぼのゝ。
霧たちこむるこやの松。かくあらん春ハあらねど
も。山本霞むみなせ川。男山ふすむ月ハ。石清水ふや
宿るらん。秋の山のすみぢの色。稲葉を渡る風の
おと。御身ふしみてぞおぼしける。さても都ふ入
給ひ。かなたこなたを見給へバ。空しき跡のみ多く
して。たまたま残る門の内。行きかよふ人もなけれバ。

浅茅が原。蓬が杣と荒れはてゝ。鳥のふしどゝなり
よ乃り八月なかばの事なれバ。まどよりかげのもり出
る月。主なき宿ふ獨すみをりて。ありがほふ鳴く雁
の。聲さへつらくぞきこしめしけん

壽永三年平家八嶋の旅の條　平家物語

不知作者或云
信濃前司行長作

荻のうへ風もやうやう身ふしみ。萩の下露もいよ
いよしげく。恨むる虫のこゑごゑ。稲葉うちそよぎ。
木の葉かつちるけしき。物思はざらんだによふけ

ゆく秋の旅の空ハ悲しかるべし。ましてや平家のひとびとの心のうち。推はかられてあはれなり」昔ハこゝのへの雲の上にて。春の花をもてあそび。今ハ八嶋の浦にして。秋の月に悲しぶ。およそ明き月を詠ても。都の今宵いかならんと思ひやり涙を流し心をすましてぞ。明しくらさせ給ひける」。

左馬頭行盛

君すめバこゝも雲井の月なれどなほこひしきは都なりけり」

軍記文の常なれど此段むげに詞づかひしどけなきがうへに、ひらけの詞あるよしハ、假字の違へるさへあれど近き年ごろ童子の常に口ずさみするも誦するあればことさらにとりいでつ。のせたりしもさるハ假字の違へる所なり

千載集 俊成卿 又やみん、かたのゝみのゝ櫻がり花の雪ちる春の曙

## 左少辨俊基朝臣二たび関東へ下向路次の條 太平記

北小路玄慧等作

俊基朝臣ハ。七月十一日に。六波羅へめし捕られて。関東へ送られたまふ。再犯赦さゞるハ法令の定る所なれバ。何と陳ぜる[る]とも赦されじ。路次にて失なはるゝか。鎌倉にて斬らるゝか。二ッのあひだをばはなれじと思ひ設られてぞ出られける」落花の雪に踏みまよふ。かた野の春の櫻がり。紅葉の錦着

拾遺集 公任卿
朝まだき。嵐の山のさむければもみぢの錦きぬ人ぞなき。

てかへる。嵐の山の秋の暮一夜を明れほどだにも。旅ねとなれバ物うきに。恩愛のちぎり浅からぬ。我がふるさとの妻子をバ。ゆくへもしらずおもひおき。年久しくも住み馴し。九重の帝都をバ。今をかぎりとかへりみて。思はぬ旅にいでたまふ。心のうちぞ哀なる。憂きをばとめぬあふ坂の関のしみづに袖ぬれて。末ハ山路をうちでの濱。沖を遥に見わたせバ。潮ならぬ海にこがれ行く。身をうき舟のうきしづみ。駒もとゞろと蹈鳴す。勢田の長はし

古今集。あふみより朝たちくればうねの野にたづぞなくなる明ぬこのよハ

うち渡り。行きかふ人にあふみ路や。世をうねの野になくたづも。子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもる山の。木の下露に袖ぬれて。風に露ちる篠原や。笹わくる道をすぎゆけバ。鏡の山ハありとても。涙にくもりて見えわかねバ。物を思へバ夜のまにも。おいその森の下草に。駒を止めてかへりみる。故郷を雲や隔つらん。番馬。醒が井。柏原。不破の関屋ハ荒はてゝ。猶もる物ハ秋の月。いつの我が身のをはりなる。熱田の八つるぎ伏拝み。しほひに今や

なるみがた傾く月に道をえて明けぬ暮れぬと行く道の末はいづくとゝほたふみ濱名の橋の夕潮にひく人もなき捨小舟沈みはてぬる身にしあれバ誰かあはれとゆふぐれの入相なれバ今はとて池田の宿につきたまふ ―元暦元年の頃かとよ重衡の中将の東夷の為にとらはれてこの宿につき給ひしに東路のはにふの小屋のいぶせきに故さとといかにこひしかるらんと長者の娘がよみたりし その古の哀までも思残さぬ涙なり ―旅館の燈幽にして雞鳴暁を催せば匹馬風にいばえて天龍川をうち渡りさやの中山越え行けバ白雲道をうづみ来てそこともしらぬ夕暮に家郷の天を望みても昔西行法師が命なりけりと詠じつゝ二たび越えし跡までもうらやましくぞ思はれける ―隙ゆく駒の足早み日はまだ亭午に上れバかれいひ進るほどとて輿を庭前にかき止むながえをたゝきて警固の武士を近づけ宿のなを問ひ給ふに菊川と申にありと答へけれ

新古今集西行法師年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山

ば承久の合戦の時院宣うけたまはりし咎によりて光親卿関東へ召下されしが此の宿にて誅せられし時昔南陽縣菊水汲下流而延齢今東海道菊川宿西岸而終命とかきつけられし遠き昔の筆の跡今は我が身の上になりて哀れいとどまさりけん一首の歌を詠じて宿の柱にぞかかれける

古もかかるためしをきく川の同じ流に身をや沈めむ

大井川をすぎ給へば都にありし名をきゝて亀山殿の行幸の嵐の山の花盛りりうどうげきしゆの舟にのり詩歌管絃の宴に侍りしことも今は二たび見ぬ夢となりぬと思ひつづけ給ふ嶋田藤枝にかかりて岡べのまくずもうら枯れて物悲しき夕暮に宇都の山べを越行けば蔦楓いと茂りて道もなし昔業平中将のすみ所を求むとて東の方へ下りしも夢にも人にあはぬなりけりとよみたりしもかくやと思ひしられたり清見がせきを過ぎ給へば都にかよへる夢をさへ通さぬ波の関守にいとど涙を催され向ひはいづくとは

伊勢物語にするがなるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。

が崎。興津。蒲原うちすぎて。ふじの高根をみあぐれバ。雪の中よりたつ煙。上なき思ひにくらべつゝ。明る霞に松見えて。浮嶋が原を過行けバ。しほひや浅き舟みえて。あはれなる田子のみづからも。うき世をめぐる車がへし。竹の下道ゆきなやむ。足がら山のたうげより。大磯。小磯見おろして。袖にも波ハこゆるぎの。いそぐとしもハあらねども。日数積れバ。七月廿六日の暮程に。鎌倉にこそつき給ひけれ

後醍醐天皇隠岐國に御遷幸の御事

## 中宮御暇申の條 太平記

北小路玄慧等作

元弘三年三月七日。すでに先帝隠岐國へうつされさせたまふときこえけれバ。中宮夜にまぎれて六波羅の御所へならせ給ひ。中門に御車をさしよせられバ。主上出御ありて御車の簾をかゝげられ。君ハ中宮を都にとゞめおき奉りて旅泊の波。長汀の月にさすらえせ給はんずる。行末の事を思召しつゞね。中宮はまた。主上をはるぐと遠

伊勢物語。秋のよの千よをひとよになせりとも詞のこりて鳥やなくらん

嶋の外におもひやり奉りて。何のたのしみのある世ともなく。明けぬ長き夜の心まどひのこゝちし。長き物思ひになりなんと。共に語りつくさせ給ひし。秋の夜の千夜をひとよになずらふとも。なほことば残りて明けぬべかりせバ。御心のうちのうきほどハ。其言のはも及ばねバ。なかなかいひいでさせ給ふひとふしもなし。たゞ御涙にのみかきくれてつれなく見えし有明も。傾く近になりにけり夜もすでにあけなんとしけれバ。中宮御車をめぐらして。還御なりけるが。御涙の中に。この上のおもひハあらじ。つれなきの命よさゝれバ。いつをかぎりぞ。とばかりきこえて。ふし沈ませ給ひながらかへる車の別路にめぐりあふ世のたのみなき。御心のうちこそ悲しけれ

不知作者或云
信濃前司行長作

俊寛僧都硫黄嶋にて成経。康頼に離別の條 平家物語

都までこそかなはずとも。せめて八此船にのせて。

九國の地までつけて給へ。なのしのこられにおもし
つる程こそ。春はつばめ（燕）。秋は田のも（面）の雁のおとづるゝ
やうに。おのづから故郷の事をもつたへきゝつれ。今
より後は。何をしてかきくべきとて。かこち焦れ
給ひけり。少将（成経）。誠にさこそはおぼしめされめ。我
らごのめし還さるゝ嬉しさも。さる事にて候へ
ども。御有様を見奉るに。更にゆくべきそら（心）もお
ぼえ候はねど。此船にうちのせ奉りて。上りたく
は候へども。都の御使（ヒ）いかにもかなふまじき由

を頻に申し。其上ゆるされもなきに。三人ながら嶋
のうちをいでさりなど聞え候はゞ。なかなかあし
う候ひなんぞ。成経まづ罷りのぼりて。ひとびとに
もよくよく申し合せ。入道相國のけしきをもうか
ゞひ（テ）。むかへに人を奉らん。その程は。日ごろおは
しつるやうに思ひなして。まち給へ。命はいのちにも
大切の事なれば。たとひこの瀬にこそもれさせ給（タマフ）
ふとも（モレサセ）。つひには。などか赦免なくて候ふべき。と
さまざまになぐさめのさまへども。僧都（ハ）堪へ忍ぶべ

うも見え給はず。さるほどに船出さんとしけれバ。僧都船にのりてハおりつ。下りてハ乗りつ。あらましごとをぞし給ひける。少将のかたみハ夜の衾。康頼入道が形見にハ一部の法華経をぞ留めける。既に纜解きて船おし出せバ。僧都綱にとりつき。腰になり脇になり。たけの立つまでハひかれていで。長も及ばずなりけれバ。僧都船にとりつき。さていかにおのおの。俊寛をバ終に捨てはて給ふか。日ごろのなさけも。今ハなにならず。ゆるされなけれバ

都までこそ叶はずとも。せめてハ此船にのせて。九國の地までとくどかれけれども。都の御使いかにもかなひ候ふまじとて。取付き給ひつる手をひきのけて。船をバ終に漕出す。僧都せん方なさに渚に上り倒れ伏して。をさなき者の。めのとや母などを慕ふやうに足摺して。これ乗せてゆけ具してゆけとのたまひて。喚きさけび給へども。漕行く船のならひにて。跡ハ白波ばかりなり。いまだ遠からぬ船なれども。涙にくれて見えざりけれバ。僧都

高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。これ松浦小夜姫がもろこし船を慕ひて、ひれふりけん（領巾振）も、これにはすぎじとぞみえし。さる程に船も漕かくれ、日も暮るれども、僧都あさましの伏どへもかへらず、波に足うちあらはせ、露にしをれて、其夜ハそこにぞ明しける」

四條畷戦の時楠正行兄弟参内御暇申の條　太平記

北小路玄慧等作

此段字音の詞など多くて、むげにくちをしくてつたなけれど、事がらをゝしく情ありて、うちみるに心もすゞしくおぼゆるかぎりなれば、臣子とある者の教にもとてとりいでつ

十三　天正本に十一とあり

（正平四年）楠帯刀正行、舎弟正時、一族うちつれて、十二月二十七日、芳野の皇居に参じ、四條中納言隆資を以て申しけるハ、父正成、尫弱の身を以て大敵の威をくじき、先朝の宸襟をやすめまゐらせ候ひし後、天下程なく乱れて、逆臣西國より攻上り候ふあひだ、危を見て命を致す處かねて思定めけることによりて、つひに攝州湊河にして討死仕り候ひ訖ぬ。其時正行十三歳に罷成り候ひしを、合戦の場へハ伴はで河内へ歸し、死に残り候を

んずる一族を扶持し朝敵を亡し君を御代につ
けまゐらせよと申置きて死去て候ふ然るに正
行正時すでに壯年に及び候ひぬこのたび我と手
を碎き合戦仕り候はずんバ且ハ亡父の申しし遺言
に違ひ且ハ武畧の云かひなき謗にあたるべくおぼ
え候ふ有待の身思ふに任せぬならひにて病に
犯され早世仕る事候ひなばたゞ君の御為には
不忠の身となり父の為には不孝の子となりぬべ
きにて候ふ間今度師直師泰に懸合身命を盡し

合戦仕りて彼等が頭を正行が手にかけて取り
候ふかの正行正時が首をかれらに取られ候ふか其
二の中に戦の雌雄を決すべきにて候へバ今生にて
今一度君の龍顏を拜し奉らん為に參内仕りて
候ふと申しもあへず涙を鎧の袖にかけて義心其
氣色に顯れければ傳奏いまだ奏せざる前にまづ
直衣の袖をぞ「濡しける」主上すなはち南殿の
御簾を高く捲せて玉顏殊にうるはしく諸卒
を照覽ありて正行を近くめして中畧正行頭を地

につけとくの勅答に及ばれば、たゞ是を最期の参内なりと思ひ定めて退出す」正行、正時、和田新發意、舎弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠将監、西河子息、関地良圓以下、今度の軍に一足もひかず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参りて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇申して、如意輪堂の壁板におの〳〵名字を過去帳に書連ねて、其奥に、

「かへらじとかねて思へバ梓弓なきかずにいる名をぞとゞむる」と一首の歌を書留め、逆修の爲とおぼしくて、各鬢の髪をきりて佛殿になげいれ、其日芳野をうちいでゝ、敵陣へとぞ向ひける」

哀傷

二條院上皇崩御の條　源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

永万元年七月
同二十八日に、新院かくれさせたまひにけり。

頃ハより下ハ御葬送より数日後のことゝ見るべし

御年二十二にして位をさらせたまひて僅に三十餘日なり〈中略〉押小路を西へ烏丸を北へ衣笠岡よりくらり暁天のほどに茶毗し奉りけりまことにあさましかりし事どもなり后宮よりはじめ奉り御身近く召使れし女房恩禄あつく賜へりし卿相雲客御あとを慕ひ後れ奉らじと歎きかなしみたまひけれども死に従ふならひなければたゞ御ひとところおくりきて参らせそなくしこのへり合せたまふ

頃ハ秋の最中の事なれバ雲井を照れる月影尾のへより通ふ風の音荻のうへ風身にしみ萩が下露おきまさせば山わけごろもおもしをれつゝぬれぬ所ぞなかりけるくさむらにまぞく虫のこゑゞも我をとぶらふこゝちしていとゞ哀ぞまさりけるさても宮こへ送どもなき御跡の習ひにて高きも賤しきも涙の露まぞ袖ぬらん

後醍醐天皇崩御の條　吉野拾遺

松翁　或云忠房朝臣号　或云吉房朝臣号

延元四年

八月のはじめのころより先帝秋の露にをかしの

されさせたまひけるが。かねて時をもしろしめしけるにや。同十五日の夜。親王を左大臣経忠の亭に移し奉らせ給ひ。三種の御寶を譲りおはしまし。御行末の事いとこまやかに仰置れて。御劔と法華經とを。左右の御手に物し給ひ。いさよひ（不知宵）の月と共に雲がくれさせ給ひけるに。附き従ひ奉りしひとびとは。唯闇路に迷ふこゝちなんし給ひける。御姿を改め奉らで。如意輪寺の御堂の後の方にをさめ（葬）奉る。下略

左府頼長公流矢に中りてうせ給ひけるをり父大相國殿御歎の條　保元物語

葉室時長卿

殿下は。御かほに御手をあてゝ。やゝ久しく泣きたまひけるが。さるにても言ひ置きつる事はなかりつるか。いかに此の世にしふしむ（執心）とまる事多かりけむ。我が身のさきのあとなるにつけても。子共の行末を。さこそおぼつかなく思ひけめ。（我モ頼長ニ）摂政関白をもせさせて。今一度天下の事取り行ふを見ばやと

こそ思つるに。命ながらへて。かゝる事を見るも。
前世の宿業にや。かせん（合戦）にいでゝ命をしまぬ兵（モ）必
しも疵をかうぶることなし。その上今度は。源平
両氏の輩も。ちくのゐべきものゝ八人もうたれぬとこそ
きけ。その外。月卿。雲客。北面まで。参り篭れる者（白川院ニ）
多かりけるに。そのなかにバ。左府一人あたれる矢に
中りて。命を失ふらん。そのあまる者の放しける矢
にかゝりあやまるらんとさてさよ（中暑）あそれ取りもかふ（換）
る物ならバ。忠實が命にかへてまし。悲しきかな。

蘇武が胡國に趣きしも。二たび漢家万里の月に
かへり。院君が仙洞に入りしも。晋室七世の風にあへ
りき。頼長一たび去て。再會いづれの時をかまたん。
かひなき命ながらへば。たとひふへん（不返）のるざい（流罪）
に行なるとも。忽に失なはるゝ事はよもあらじ。もし
東國にたゞよはせば。津軽や蝦夷の奥までも。遠路
をしのぎて。駒に鞭をもうちてまし。もし西海に
左遷せられば。鬼界が嶋のはてまでも。船に棹を
もさすべきに（コトナル ソレトハコトニテ）。ゆきて帰らぬ別のうち。（コレヨリ）悲しきこ

とはなきぞとよ。許らざりき。是程に老の心をなやまれべしとはとて。御涙せきあへさせたまはぬを。見奉るもあはれなり」

源為義の子天王丸船岡にて失はれし時乳母の夫内記平太歎の條　保元物語

葉室時長卿

此君を手なれ奉りしより後。一日片時も離れ参らせることなし。我が身の年の積ることをば思はで。早く人とあらせ給へかしと。あけくれ思ひて



やしなひ参らせ。月日の如くに仰ぎつるに。只今かゝる目を見ることの心うさよ。常は我が膝の上にきて給ひて。髯をなでゝ。其の人となりて。國をも荘をも設けてしらせんずらんなど。のたまひし物をと。かりねの寐覚する。内記々々とよぶ御聲の。耳の底にとゞまり。只今の御すがた。幻にかげろへば。さらに忘るべしとも覚えねば。是より帰りて命長くとも。千年萬年をふべきや。死出の山。三途の川をば。誰が八介かは申べき。怖しく思召さんまゝにつけて

もはや我をこそ尋給ため生きて思ふも苦しき
に主の御供仕らんといひことをて腰の刀を
ぬくまゝに腹かき切てうせにける　下畧

## 九條廢帝傳

本居宣長

九條廢帝と申し奉るは順徳天皇の第一の皇子にて御母は中宮藤原立子東一條院と申せし後京極摂政良経公の御女なり帝建保六年十月十日に降誕御諱は懐成と申せし同年十一月廿一日に親王宣下あり廿六日に皇太子に立ち給ひ承久三年四月廿四日に御年四つにて受禅あり然るところに東のぬす人ども北條義時いたく荒びてゆゝしき世のみだれおこりてかの族泰時時房などいふ賊どもおし上り同じき六月に京に乱入りていともかしこく三所の天皇たちを遠所に遷し奉りこの新帝をもおろし奉りぬるはあさましな

どもとのつねのことをすそいへ。言はむ方なきさか（逆）
しま事のまがのこと（枉事）ぞ有りける。かくて、此の帝は、
其の七月九日に位を譲らせ給ひて、ひそくのに九條
院に渡御ありそきより、此の院に。御母女院と御同
居ましまして、文暦元年五月廿日に崩御。御年十
七までおはしましける。いまだ御元服の儀もおはせ
しまさざりき。受禪ありしかども、僅に四月ばかり（間）
におはしまさせたまひて、いまだ即位の儀も行はれ
ざりしかば、皇代の御數にも入らせ給はざるな
り。つゞきのところ（地）にその葬り奉りける。御陵の在
處も聞えぬは、いとも（甚）かしこき御事になん（アリケル）。御子
は。崩御ありし年に。法印性慶の女の腹に。姫宮ひ
とところ生れさせ給ふ。義子内親王と申しし。弘長
元年三月八日。御年廿八にて院号かうぶりたまひ
て。和徳門院と申しき。

冬嗣大臣　大鏡

藤原爲業

左大臣冬嗣のおとゞ（大臣）は。内麿のおとゞの三郎。公卿に

て十六年。左の大臣の位にて六年。田村（文徳帝）の御おほぢ（外祖父）にておはしましゝ。かゝるがの故に。嘉祥三年庚午七月七日。贈太政大臣になりたまへり。閑院大臣と申す」このおとゞは。おほくさをのこ子（男）十一人おはしたるなり。されどくはしきをんなご（女子）たちのことはくはしく知り侍らず。たゞし田村のみかど（帝）の御母后。贈太政大臣長良のおとゞ。太政大臣良房のおとゞ。左大臣良相のおとゞは。ひとつ御はら（腹）なり」

長良中納言　大鏡

藤原為業

贈太政大臣権中納言従二位左兵衛督長良卿ハ。冬嗣のおとゞの太郎。母ハ白川大臣ノ女ニテ西三條大臣におなじ。公卿にて十三年。陽成院御ときに。おほぢ（祖父）におはしまするがゆゑに。元慶元年丁酉正月に。贈左大臣正一位。また贈太政大臣ニセラル。枇杷大臣と申す（コレハひが事ナリ）」此おとゞ。御子六人おはしまし。其中に。基經のおとゞぞすぐれたまへり」

縣居大人

本居宣長

あがたゐの大人は。賀茂縣主氏にて。とほつみおやは。神魂神の孫。鴨武津之身命にて。八咫烏となりて。神武天皇を導き奉りたまひし神なること。姓氏録に見えたるがごとし。此神の末。山城國相樂郡岡田。賀茂大神をもちいつく。師朝といひし人。文永十一年に。遠江國敷智郡濱松庄岡部郷なる。賀茂新宮をいつきまつるべきよし。詔を蒙りて。彼の郷を賜はり。すなはち彼の宮の神主

になりける。此の事引馬草に見え。又綸旨の如きなる物あり。又乾元元年なる。詔をかうぶりて。かの岡部の地を領ぜるが。これハ正しき綸旨ありて。家に傳れり。かくて世々の神主たりしを。大人の五世の祖政定といひし。引馬原の御軍に功ありて。東照神御祖君より。來國行がうちたる刀と。丸龍の具足とを賜はりぬ。この事は三河記にも見えたり—さて大人は。元祿十年に。此の岡部郷に生れ給ひて。このましほどより。古學にふかく

心をよせて。享保十八年に京にのぼりて。稲荷の荷田宿祢東麿大人の教をうけ給ひ。寛延三年に江戸に下り給ひて。その後田安殿に仕奉り給ふ。この殿より。葵の文（アヤ）の御衣を賜はり給へる時の歌。あふひ（葵）てふ。あや（紋）のみぞ（御衣）きるも。うぢびと（氏人）の。かづら（縵）のむりのと。神やしるらむ」明和六年十月晦の日。とし七十三にてみまかり（死）給ひぬ。武蔵國荏原郡品川の。東海寺の中。少林院の山に葬る」こは。大人の弟子なりし某がしるしおけるにより志

るせり。なほ父ぬし母とじなどをも。しるすべきものあるにも。もれたるは。又よくしりたらん人にそひきて。しるすべくなん」

和文讀本卷三終